
月を見上げて

はしもと なおや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月を見上げて

【Zマーク】

Z8809V

【作者名】

はしもと なおや

【あらすじ】

満月を見ると高校生のころを思い出す。当時の恋人との会話。恋人の友達は、月のネックレスがよく似合っていたそうだ。

今日は、月がきれいだ。コンパスで書いたように丸い。月の見え方というのは、年齢とか気持ちによって全く異なつてくる。例えば、満月だつて、ときにはそれが世界のすべてのように思えるけど、その満月が世界から何かを奪つているかもしれない不安になることもある。ただ、そういう見え方の違いというのは、自分のなかの問題だ。月は僕を鏡のように映してくれる。だから、自分がわからなくなつてしまつたときには月を見る。それが、僕が僕であるための手段になるのだ。

こんなに丸い月を見ていると、昔のことを思い出してしまう。あれは、たしか高校二年生の夏だ。もう五年も経つてしまった。そんな時間も月にとつては大した問題ではないのだろうな。その五年間で僕は、こんなに変わったのに。

僕には泉という恋人がいた。海岸で行われた花火大会のあとに、なんとなく寂しくなつてしまい一人で防波堤に座つていた。泉は水色の浴衣を着ていた。何気ない会話のなかで、月の話になつた。その日も満月で、その光が波に氣だるそうに波に揺れていた。なんだか僕の方まで揺れているような感じだつた。

「満月を見ると、ある女の子を思い出すの。近所の幼馴染で同じ年。高校が違うからいつも会つてわけじゃないんだけど。久しぶりに会つたときに、かわいいネックレスを付けてきたの。月のネックレス。その子、そういうタイプじゃないからびっくりした。男勝りで、陸上部に入つてハードルとかやつてたのかな。もちろん、髪もショートカット。けど、そのネックレスがうらやましいくらい似合つた。チーンの真ん中に薄いガラスでできた満月がぶら下がつているだけのもの。そんな高くなさそうなんだけど、すごく大事そうにしてた。

「それで、聞いてみたの。それ、彼氏にもらったの？ お互い隠し事はなしだって言つたでしょって。でも、何も言わなかつた。いつもだったら、笑つて話すはずなんだけどね。でも、サバサバしているタイプだからしつこく聞けば白状すると思つてしつこく問い合わせてみたの。でも、私、すぐひどいことしてた」

月が一瞬雲に隠れて海が暗くなる。泉は唇をかみしめ、目をつぶつた。

「死んだんだって。中学校のころに付き合つていた男の子。同じ中学校だから付き合つてたことは知つてたんだけど、たしか転校したのよ。三年生になる前に。何で死んだかは、聞かなかつたわ。涙がボロボロこぼれて。あいづちを打つことだけで精いっぱい。でも、その子一度話しだしたら、洪水のように何から何まで話してきて、聞く方もきつかつた。なんていうか、痛々しいの。死んだひとを生きているように話すことが。死体解剖をしているみたいで。そう、とか、うん、とかしか言えなくて。

「それで、ネックレスはその男の子からのものらしいの。でも、付き合つている時じゃなくて死んでから。机の引き出しのなかの彼女の住所を書いた封筒に入つていたんだって。手紙もあつたみたい。なんて書いてあつたと思う？ 『誕生日おめでとう！ 十五歳も幸せな一年にしような。ずっといっしょだぞ』 気恥ずかしくて渡せなかつたのよ。中学生つてやつぱりそういうところあるでしょ。でも、結局、長くは続かなかつたって聞いたわ。でもね、悪い言い方だけどその男の子がしんだから想いが伝わつたっていうか……」

死んだら全て終わりだよ、と僕は言った。

うん、と泉は下を向き、泣いた。とても静かな泣き方だつた。そして、赤い巾着からネックレスを取り出した。月がガラスの月を照らすのをみると、なんだか宇宙を漂つてゐるみたいだつた。

「その子も、後を追うように死んじゃつたの。自殺とかじやなくて、普通の事故。道を渡ろうとしたら、トラックがいきなり曲がつてきつたつて。このネックレスの話を聞いた一週間後くらいだつた。まだ

死んでから一ヶ月経つていいわ。まだ実感がわからなくて、まだどこかにいるんじゃないかって思うけど。これ、お葬式のときに取つてきちゃったんだ。どうしても、そうしなきゃいけないと思つた。でも、ここでさよなら

そう言つと泉は立ち上がり、海岸までゆっくりと歩いていき満月に向かつてネックレスを投げた。一瞬、二つの月が重なつた。それを見ながら、僕は泉のことだけを考えていた。

あのネックレスは今、どうしているのだろうか。暗い海の底から見える本物の月に憧れているんだろうか。もしかしたらその方がよいのかもしれない。

泉とは、もう恋人の関係ではなくなつてしまつた。でも、今も友達として仲良くしている。もうお互いつよりを戻すといつことはないだろうけど、一生続く関係になるとと思う。そうなればいい。

今夜の月は、他の人にはどんな風に見えているだろう。僕は、なんとなく涙を流したくなつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8809v/>

月を見上げて

2011年10月8日18時07分発行